

学生を育てる天才、井上和子先生

岩本 遠億

井上和子先生は、2017年5月3日にご帰天になった。私は、国際基督教大学(ICU)では大学院の学生として、神田外語大学では同僚として先生のご薫陶を受けた。

井上先生は、40代になってから米国ミシガン大学で博士号を取り、それ以降、生成文法という先端的言語理論を日本語分析に応用する研究で、70年代、80年代の長きにわたって学会を牽引した。日本言語学会の会長ほか、種々の学会で要職を務められた。90年代以降は、大学行政や文部科学行政にも関わるかたわら、後進の育成に努め、神田外語大学の学長を退いた後も、大学院の修了生たちと毎月研究会を行い、10数年にわたって彼らを導き続けた。

先生は、学生を育てる天才であった。

ICU時代には、修士課程の学生と一緒に最先端の生成文法理論の論文を授業でも、授業以外の読書会でも読み、そして、それを取り入れた修士論文を書くように指導なさった。孫のような歳の私たちを対等の研究者colleagueと呼び、一緒に学び、一緒に議論することを楽しみにしてくださっていた。先生が書いた論文や発表に、学生たちが遠慮のない批評を加えることもしばしばだったが、先生はニコニコとそれを受け止め、学生が臆せず発言し、自由に発想する能力を引き出してくださったのである。一方、提出した論文やレポートに対しては、先生は厳しかった。私が修士論文提出の1ヶ月前に先生に見て頂いた原稿について、先生は、「self-contradictoryではないですか?」と冷たく突き放された。また、先輩方からも「何度もレポートを突き返された」と聞いた。優しいだけではなかったのである。先生に生まれ、ICUで生成文法を学んだ者の多くは、アメリカなどの一流大学の博士課程に進み、現在、内外の大学の言語学の教授として活躍している。

学生を育てる天才という側面は、文科省の科学研究費のプロジェクト運営にも現れていた。先生は、ICU時代には言語の普遍性と日本語の個性性に関するプロジェクトで科学研究費を継続的に獲得し、米国で最新の言語理論で博士号を取った新進気鋭の研究者に参加を呼びかけるとともに、ICU内の若手研究者

や大学院の学生たちも研究に参加させて、最新の言語理論の息吹に触れさせ、研究報告書に論文を載せるように強くご指導になった。しかも、研究がプロジェクトの当初の計画と合致しない方向に進んでも、「これが研究のおもしろさですよ」とおっしゃり、むしろそれを成果として喜んでおられた。

神田外語大学においては、大学院言語科学研究科設立に当たり、故黒田成幸氏やジョゼフ・エモンズ氏をはじめとする生成言語学の大家を特任教授として招聘し、先端的研究を行う本物に触れさせることを人材育成の眼目としておられた。神田外語大学が先端的研究拠点（COE）形成のための科学研究費を獲得したおりに、研究リーダーとして全体を指揮なさったが、MITからノーム・チョムスキー氏を招聘して講演会を開催するだけでなく、大学院生にチョムスキー氏の前で発表させ、最先端の研究に参加していくことの喜びを味わわせてくださった。そのようにして育てられた人たちは、やはり、国内の大学で教鞭を執るとともに、学会でも役職を務めるなど活躍している。

私は、学部は東京学芸大学で国語教育が専攻であったが、日本語生成文法に触れ、井上先生のもとで学ぶために1982年にICUの大学院に進んだ。先生は、私がそのような背景を持っていることをお心に留めてくださり、日本語教育が国策としても推進されるようになるとの見通しのもと、日本語教育関係の仕事をご紹介くださったりしていた。そして、私がオーストラリア国立大学博士課程を修了し、博士論文を提出した1992年、当時学長を務めておられた神田外語大学に日本語・日本語教育の教員としてお呼びくださった。このようにして教職に就いた学生は枚挙にいとまがない。先生は、言語学者として育てるだけでなく、将来の職をも見据えて、学生たちを導いてくださったのである。

受けた御恩は到底返しきれものではない。学生を育てることに全力を尽くすしかない。

98歳、まさに天寿を全うしての召天であった。天での再会を望みつつ。感謝をこめて。